

西伊豆沿岸漁村にみる 太平洋沿岸ペンキ塗り住宅群の成立時期に関する考察

A Study on the Formation of Painted House Villages on the Pacific
Considered through the Case Study at Nishi-Izu Fishery Villages

○神吉紀世子^{*1}, 山崎義人^{*2}, 山本新平^{*3}

KANKI Kiyoko, YAMAZAKI Yoshito and YAMAMOTO Shinpei

Among the coastal villages on the Pacific, we can find the villages with Japanese styled painted houses. It is unknown how the distribution of such villages was appeared, and when Japanese styled painted houses -not western styled painted houses- increased with what kind of background. We have already shown that painted houses in Taiji-cho were appeared as the influence from western culture experience since Meiji period, and in Nachikatsuura-cho as with the prevailing process of painting materials. We focused in the Izu coastal villages and found those formation with the prevailing process of painting materials. Those painted house groups might be promoted with the Fishery industry's development and the promotion of dense residential zones for workers for Fishery industry.

キーワード: 漁村集落, ペンキ塗り住宅, 下見板張り, 西伊豆町安良里

Keywords: Fishery Village, Painted House, Siding Board Wall, Nishi-Izu cho Arari

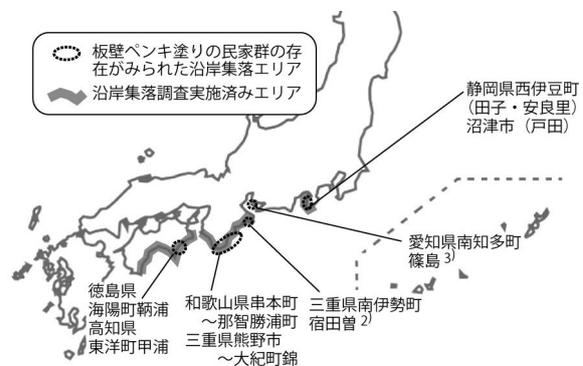
1. はじめに

本研究は、太平洋沿岸の少なくとも静岡から徳島に点在して確認される、板壁にカラフルなペンキ塗装を施す漁村の木造住宅群の特徴を捉えることを目的とした研究の一部である。とくに、本稿では、静岡県伊豆半島西部の西伊豆町安良里地区を主な対象とし、既に筆者らが概要報告¹⁾を行った和歌山県太地町周辺集落との比較から、ペンキ塗装の普及時期について考察する。

筆者らは、2002~05年に紀伊半島沿岸(和歌山県美浜町日ノ岬~三重県大紀町錦)、2006~08年に伊豆半島沿岸(沼津市戸田~東伊豆町大川)、2006~07年には、徳島県・高知県の全沿岸集落の外観調査を実施した。一方、書籍・既往研究において、三重県南伊勢町宿田曾²⁾、愛知県南知多町篠島³⁾にもペンキ塗り住宅群の存在が報告されている。これらの結果、図1のように少なくとも徳島県から静岡県の間の複数の集落で、ペンキ塗り住宅群が存在する。これらの住宅は平屋~二階建ての木造和風住宅で、洋風住宅として建設されたものではない。そこ

で筆者らは、ペンキ塗り住宅群をもつ太平洋沿岸漁村には何らかの共通する特徴があるのではないかと推論し引き続き太平洋沿岸集落の調査を進めているが、本稿では、前述のうち伊豆半島での調査結果を主にとりあげる。

森下ら⁴⁾も洋館建築群研究にあたっての問題意識として述べているように、歴史ある地区での景観保全の取り組みでは、多色の景観は積極的評価を受けないのが一般的である。しかし、集落の近現代史上の特徴に応じてカ



*1 京都大学都市環境工学専攻・准教授、博士(工学)
*2 兵庫県立大学人と自然の博物館・講師、博士(工学)
*3 財団法人和歌山県文化財センター・参与、工学修士

Dept. of Urban Environmental Eng. Kyoto Univ. Assoc.Prof. Dr. Eng.
Museum of Hyogo Pref. Univ. Assoc.Prof. Dr.Eng.
Wakayama Pref. Center for Cultural Property, M.Eng.

カラフルなペンキ塗り住宅群が成立したという事例が存在するならば、当該事例には一種の歴史性を認め多色を排除しない景観施策が要る。本研究はそうした配慮が必要な集落が国内広域にわたって存在する可能性に着目しており、その成立過程を知ることが重要だと考えている。

なお、この研究は、静岡県産業部「静岡県戦略課題研究『大井川・伊豆』」の一環として行ったものである。

2. 既往研究にみるペンキ塗り住宅の普及に関する知見

(1) 函館の洋風建築研究から

カラフルなペンキ塗装の施された住宅に関する既往の研究成果には、森下ら⁴⁾⁵⁾⁶⁾による、函館・神戸の洋風建築群の一連の研究がある。とりあげられているのは洋風住宅であるが、ペンキの塗り初めの時期や色のもつ時代性についての考察がなされている。とくに、函館の事例において明治初期以降の8つの時代区分ごとに色の基調と普及の傾向が示されており、明治初期に洋風公共施設にペンキ塗装が始まっても、一般の住宅にペンキが塗られ始めたのは1960年代以降であるという建物所有者の口述、明治初期から中期(白色)→明治中期から後期(多色)→明治末期(白系、灰系)→大正期から昭和初期(多色)→戦時中(暗色)→1950～60年代(多色のなかの緑系、ピンク系)→1970～80年代(多色、パステル調、塗り分け)→1990年代以降(多色、パステル調、塗り分け・下見板の減少)という色調の推移がその色選択の背景考察とともに明らかにされており、戦時中にイカの油が塗られた事例が1つあること等が示されている。⁵⁾

(2) 愛知県篠島の漁村の和風住宅研究から

太平洋沿岸の愛知県篠島の和風住宅の研究³⁾では、塗装について、強風強雨が発生し住宅外壁を傷めやすい条件にあるため、土壁の上に空隙をあけて板張りとし、当初コールタールが塗装されていたが、戦後ペンキに変わり、色も増加していったと示されている。

(3) 和歌山県太地町・那智勝浦町の和風住宅研究から

筆者らが既報した太地町・那智勝浦町沿岸集落の和風住宅の場合¹⁾、戦前よりペンキ塗装の住宅が出現したことがわかっている。明治20年代頃から紀伊半島南部沿岸地域で、アメリカ大陸方面への出稼ぎや移民が増え、渡航後しばらくして帰国した人々のなかに、郷里で洋風住宅や部分的に洋風の意匠・室を備えた住宅を建てペンキ塗装をした例が多数ある。太地町太地では、戦前から和風住宅でペンキ塗装をした事例もみられたという口述が得られた。太地周辺の4地区では帰国者がペンキ塗装の

住宅を建てたが、当時それ以上にはあまり普及せず、コールタール等が防腐剤として用いられており、1950年代以降ペンキにとってかわったと推察された。

(4) ペンキ塗り住宅の普及の時期についての仮説

以上の既往研究・資料からみると、洋風文化との接点を既に明治期にもつ条件にあった地区は、主として洋風建築において戦前よりペンキ塗装が取り入れられ、その影響から周囲にも広まる傾向が現れるが、一般住宅は、主として戦後の1960年頃以降にペンキ塗装が広まったという、普及の時期に2時点があるとの仮説が推測できる。業界団体発行の資料⁷⁾にも、昭和30年頃から一般住宅むけの塗料普及活動が活発化したと述べられている。

一方、ペンキ塗り住宅群のある地区は太平洋沿岸に点在していることについて、戦前の洋風文化との接点の有無が地域によって異なることは理解できるが、1960年頃以降のペンキの普及は全国的現象であり、地区が点在することの説明にならない。一部の地区に1960年頃以降にペンキ塗装が普及した背景を考察することは、ペンキ塗り住宅群の成立過程を明らかにする際に必要な考察である。伊豆半島沿岸集落については、この点から、普及の時期とその背景に着目して、調査を行った。

3. 伊豆半島沿岸集落にみるペンキ塗り住宅

(1) 調査の手順

伊豆半島の中南部沿岸を対象とし、とくに観光地化が進んでいない西南部の戸田～田牛については沿岸全ての集落を対象として、木造民家の外観調査を実施した。対象集落は図2に示す36集落である。36集落について、旧版地形図(明治から昭和27年まで⁸⁾)、空中写真(国土地理院・昭和51年撮影カラー空中写真⁹⁾)、現在発行中の1/25000地形図、の3種を用い踏査範囲を抽出した。1976(昭和51)年空中写真の時点までに成立している集落の範囲を踏査範囲とし、木造民家の屋根の形式・階数・立面デザイン・外壁仕上げを把握した。これによりまず、ペンキ塗り住宅がまとまってみられる集落を把握した。

さらに、これらのペンキ塗り住宅群の成立についての考察を進めるために、ペンキ塗り住宅群がよくまとまって存在する西伊豆町安良里地区をとりあげ、①上記の旧版地形図・空中写真・地形図、さらに、古写真が掲載されている文献¹⁰⁾¹¹⁾とヒアリング調査¹²⁾を用いて、その住宅群の成立時期の検討を行い、同時に②ペンキ塗り住宅とそれ以外の西伊豆地域の伝統的な木造住宅の特徴¹³⁾¹⁴⁾と比較することによってペンキ塗り住宅の建築の形式が

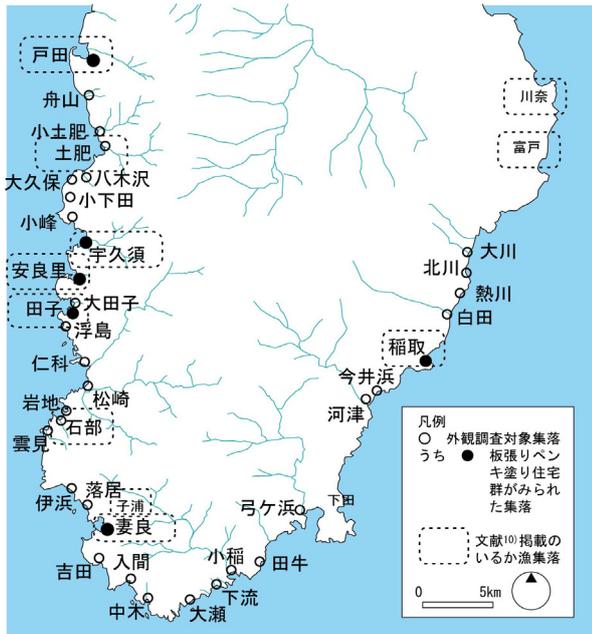


図2 調査対象集落およびペンキ塗り住宅群のある集落の分布

表1 ペンキ塗り住宅群の例 (2006~7年撮影)

集落名	ペンキ塗り住宅事例写真	集落名	ペンキ塗り住宅事例写真
戸田		宇久須	
安良里		妻良	
田子		稲取	

どのように類似または違っているかを検討することとした。①②から、その成立時期について考察し、最後に2章で得られた既往研究からの仮説との対応を考察した。

(2) 伊豆半島中南部のペンキ塗り住宅群がある集落

調査からペンキ塗り住宅の集積を見つけることができた集落を、図2に示した。これをみると、ある地方にかたまって分布するのではなく、散在するように見える。

小冊子『静岡いるか漁ひと物語』¹⁵⁾は伊豆半島沿岸で営まれてきた海豚漁についての貴重な文献で、そのなかで取り上げられている集落が戸田・土肥・宇久須・安良里・田子・石部・子浦・妻浦・稲取・富戸・川奈等であ



図3 安良里集落の地形と網小屋 (空中写真出典: 静岡県 HP・漁港一覧より引用 16))

表2 地形図・空中写真にみる安良里集落の拡大

	地形図・空中写真の安良里集落部分
1896年 明治29年 地形図 修正測量版	 沿岸沿いの道に沿って密集地マーク
1926年 大正15年 地形図 修正測量版	 密集地中央を東西に通る道が開発されている
1952年 昭和27年 地形図 応急修正版	 上記の道に沿って市街地密集地マーク少し拡大
1976年 昭和51年 国土地理院 空中写真	 さらに密集地が東にむかって拡大

る。図2に示すようにペンキ塗り住宅のある集落と重なる傾向があることが興味深い。直接の因果関係を即断することはできないが、同文献によれば、海豚漁の特徴の1つが「集団化された漁業」が成立している点であるとされており、この点は4章において考慮することとした。

(3) 安良里のペンキ塗り住宅群

① 集落の拡大経過

西伊豆町(元・賀茂村)の安良里は、伊豆半島西海岸の住宅が密集した集落で、湾をはさんで対岸に「網小屋」が残され地元で保存されていること等でも知られる。

安良里の集落の拡大経過を表2に示した。これをみると、市街地は、明治29年当時には、沿岸に沿う形で現在よりも小さい。明治初期の大火のために市街地は大きな被害をうけたとされており¹⁷⁾、その後の集落再建後の

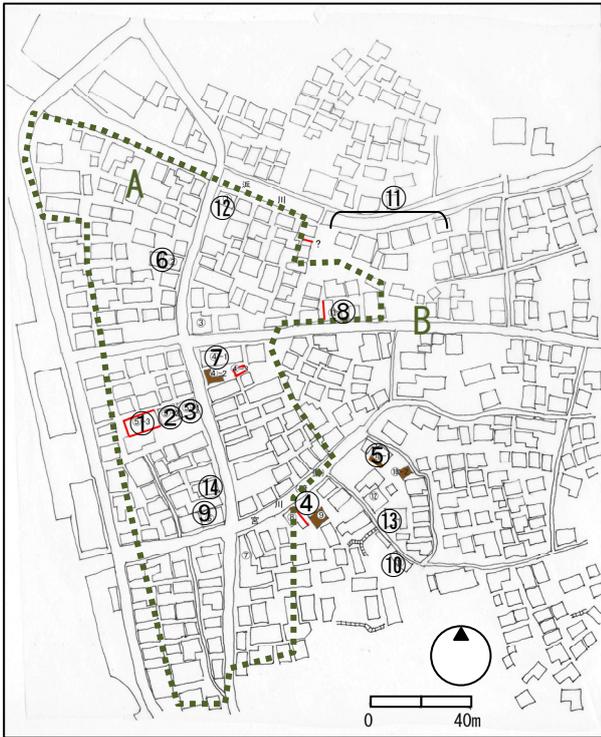


図4 安良里集落の建築物分布 (2007年作図)

凡例：
 海鼠壁 (確認部分のみ)  石張り (同左)
 昭和27年地形図で密集地と表記されている範囲
 ①~⑪ 図5中の写真の建物の位置

状況を示すとみられる。大正15年の地形図には、市街地の規模はそれほど変化していないものの東西に地区の中央をまっすぐ貫く通りが整備されていることが見てとれる。この道に沿って密集地の少し外に郵便局が開局している。現在もこの郵便局の位置に、郵便局建物の遺構が残っている(図4、図5)。昭和27年の地形図には、この道ははっきりと東西にのび、密集地がこれに沿って少し広がっている。昭和51年の空中写真では、さらに密集地が広がっている。この密集地の大きさは、現在の安良里の集落の大きさとはほぼ同じである。

安良里地区は海豚漁で知られた漁港で、文献¹⁵⁾にその様子が記載されている。ヒアリングからは、集落の密集地の拡大過程における住宅の増加は、そうした集団化された漁業に従事する世帯の需要に対応するように開発供給されたという口述が聞かれた。この地区は、「どの場所でも井戸を掘ると地下水が出て、住宅建設場所を選ぶ必要がなくどこにでも開発できた」との口述も得られた。こうした口述からも、市街地の拡大がある時期に集中し多くの住宅が建設された時期があるように推察される。

昭和27年までに密集地となっていた範囲は、海岸線に対してほぼ垂直の方向に直列し、間口が整然と割り付けられている(ヒアリング¹²⁾によると図4中の①~③の建物は同一世帯の一連の建物である)¹²⁾。その外側に隣接

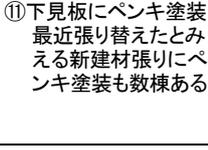
立地場所	ペンキ塗り住宅
図4のA： 昭和27年までに密集地となった範囲のペンキ塗り住宅の例	  ⑥正面は戸袋等部分的に下見板にペンキ塗装 ⑦二階側面は、一部が漆喰・土壁のままであり、板張りペンキ塗装   ⑧郵便局の遺構 正面は下見板にペンキ塗装で洋風軒、側面は一部漆喰・海鼠壁 ⑨本二階建てで下見板にペンキ塗装   ⑩本二階建てで下見板にペンキ塗装 ⑪二階は部分的に漆喰。土壁の上に板張りを巻いたようにみえる。
図4のB： 昭和27年以降51年までに密集地となった範囲のペンキ塗り住宅と下見板張りのみの住宅	  ⑩下見板張りであるが塗装をしない例。板の下は土壁 ⑪下見板にペンキ塗装 最近張り替えたかみえる新建材張りにペンキ塗装も数棟ある   ⑬下見板にペンキ塗装

図5 密集地成立時期別のペンキ塗り住宅・下見板張り住宅



図6 伝統的住宅の特徴に合致する農家住宅

する位置にあたる④⑤は、図6にみるように、農家住宅の特徴に合致し、ヒアリング調査からも、安良里の最古クラスの元農家とのことで、このことから、この近辺がもとは農業地域だった可能性を示し、表2の大正以前の様子と一致する。昭和27年までに成立していた密集地の外側は、現在、同様の密集度でさらに住宅が分布するが、上記のような海岸線に対して垂直の方向をもつ宅地割りのような秩序がみられず、スプロール地区とみられる。

文献¹⁰⁾¹¹⁾に掲載されている写真には、1960年代の戸田・安良里・田子・妻良等の伊豆半島沿岸の家並みの高台からの俯瞰モノクロ写真があり、西海岸の集落は妻良を除いてほぼ全て既に瓦屋根の住宅群になっている。その中にはごく一部金属製で黒っぽい塗装をしているみられる屋根が混じっている。安良里の写真は、ちょうど図4の昭和27年までに成立していた密集地の範囲を俯瞰する写真で、数棟ながら、瓦屋根の本2階建ての家屋で、下見板張りがつよい白色に写っているものがみられ、1960年代半ばまでにはこの範囲に一部ペンキ塗り住宅が現れていたことを示していると考えられる。

②伝統的住宅とペンキ塗り住宅・下見板張り住宅

現在、ペンキ塗装の住宅は集落内全体にみられるが、現在の集落の範囲は、場所によって宅地化の時期が異なる。2章で、昭和30年頃よりペンキが普及したとされることを考慮し、図4のように、昭和27年までに成立していた密集地の範囲(図4のA)とその外側(図4のB)にわけ、現在のペンキ塗り住宅を考えてみることにする。

まず最初に、安良里を含めた、西伊豆地方の伝統的な木造住宅のスタイルについてみると、『西伊豆町誌資料第二集民俗編上巻』¹³⁾ P.244~249には、伝統的民家の間取りが5例示されており、いずれも平入り田の字型の平面である。大正3年出版の『静岡県南豆風土誌』¹⁴⁾ P.503には、農家建築について、母屋は南面、木造草葺、外縁の平屋が一般的で、明治以降は瓦葺きが増加したと記載され、商家建築については、木造瓦葺き二階建てが多いとされている。一方、伊豆半島沿岸は、松崎町を中心に、漆喰・海鼠壁の仕上げを用いる伝統的な住宅が有名である¹⁵⁾が、これは、冬季の西風の強風が卓越し大火の経験をもつ地区が多く、防火に気をつける態度と、同時に、豪華な仕上げとしての認識の現れとされている。また、伊豆石の産出地が点在するため、石造の建築物が各地でみられることも特徴である¹⁶⁾。この特徴は、上にも述べた図4のA、Bの境目付近に立地する農家住宅④⑤に対応している。側面によって漆喰、海鼠壁、板張

り塗装、石張り、と仕上げを使いわけていることがみられ、間取りは伝統的な農家住宅の形式に合致する(図6)。また、⑤の例で、側面の下見板張りにタール状の塗装の痕跡がみられた。このことより、伝統的な住宅で、下見板張りの部分には、ある時期にタール状の塗装をしていた事例が存在することとなる。

次に、図5に例示するような、密集地の成立時期とペンキ塗り住宅の関係をみてみる。

Aの範囲でみつかるペンキ塗り住宅をみると、本二階建てで寄棟が多く、⑥のように正面は部分的にしかペンキを塗らず土壁のままの例や、⑦や⑭のように壁の一部が漆喰・土壁のままの例が散見される。真壁造の土壁または漆喰壁の上から、大壁造のように下見板で巻くように板壁がついているようにみえる。すぐ隣に隣家がたつ側面は下見板張りになっているようにみえる。この点は、安良里の南隣の田子集落でも共通し、昭和27年までに密集地として成立していた範囲に、側面のみ下見板張り正面は土壁となっている例が散見された。なお、⑧のように、公共施設で洋風の意匠を取り入れて建てられた事例は現在⑧の他にはほとんど見られなかった。

Bの範囲でみつかるペンキ塗り住宅も概ね本二階建てだが破風をみせる切妻屋根の部分があり、この破風の部分以外は、ほぼ全体に下見板貼でペンキ塗りである。目立つ黄色や緑など濃く鮮やかな色が登場している。図5の⑩は、調査事例のなかでは1つだけ見つかった、下見板張りだが塗装の痕跡が見えなかった例である。

以上の外観調査にあわせて、ペンキ塗りがいつ頃から開始されたかを、ヒアリング調査の際たずねた¹²⁾。ヒアリング対象者の全員が、以前は主として防腐剤を塗布し、コールタール等ではなく透明な防腐剤であったという。ペンキは昭和30年代ごろから、塗り替え時に手軽に入手できる塗料として用いるようになった、とのことであった。塗り替えは、約10年ごととのことであった。

以上の結果からまとめると、安良里で最も古い住宅建築である農家住宅でも側面に下見板張りをしている例があり、ペンキまたはタール様の塗装がされている。一般にはペンキが普及していなかった昭和27年までに密集地となっていた範囲では、現在多くのペンキ塗り住宅があるものの、二階部分を中心に、漆喰壁・土壁を残すものがみられ、二階の下見板は、柱の外側から全体を巻くように取り付けられている。また、側面は下見板張りの場合が多い。下見板の部分は塗装がされているのがほとんどである。昭和27年以降に宅地化が進んだエリアで

は、破風部分をのぞいて全体的に下見板張りでペンキ塗りとなっているものが過半を占める。ペンキの普及そのものは昭和30年代以降のようで、それまでは防腐剤を塗装していた。以上のような知見が得られたことになる。

これらのことから、若干の推測を含めて考察すると、昭和27年までに建てられた住宅では、本来漆喰や土壁仕上げの伝統的住宅が多い伊豆地域において、下見板張りは漆喰壁や土壁の保護のため付加的に下見板が被せられていたとも考えられる。壁面保護のために下見板を被せるスタイルは、文献³⁾の篠島にみられる。昭和27年以降、下見板の使われ方が、雨風の強くあたる部分を守るためから、住宅全体の外壁仕上げに普及し、その後まもなくペンキ塗装が全体に普及したとの経過が推測される。

4. 西伊豆地域のペンキ塗り住宅にみる太平洋沿岸ペンキ塗り住宅群の成立時期

最後に、2章(4)でみた仮説との対応を考察する。

今回の調査では、洋風文化との接触によるペンキ塗り住宅の普及のケースはみられなかった。伊豆半島も、紀伊半島と同様に、海外出稼ぎ・移民の歴史等、早くから洋風文化と触れる機会があったはずであるが、住宅にはあまり影響を及ぼさなかったとみるべきであろう。これは、防火やデザインに優れた住宅は海鼠壁の住宅であるという伊豆半島の強い文化が関係しているかもしれない。従って、ペンキ塗りの成立時期は、2章の(4)の仮説のうちの1960年頃以降が該当すると判断される。

次に、ペンキ塗装が普及した背景を考えると、1960年代以前から、下見板張りと防腐剤塗装が行われていたことがペンキへの転換を容易にしたと考えられる。この点は那智勝浦町の事例に類似し、とくに冬に西風の強い西海岸沿いという立地にあり板壁が傷みやすいことが影響したと推察される。さらに、何故下見板張りが早い時期に導入されたかについて考察すると、前述のように、海豚漁という集団化された漁業を営むようになってともに世帯が急増した時代に、密集した集落が拡大した際の住宅のスタイルになったという推測がなりたつ。南伊豆の沿岸漁村など現在も世帯単位の小規模な漁業が主である漁村では、もと農家住宅であった住宅が現在もよく残され、安良里のような密集した集落とはなっていない²⁰⁾こととあわせて考えると、漁業の集団化、住宅の増加が生じた際に、従来の農家住宅的なスタイルではない本二階の住宅が普及することになった、という経過が推測される。図1に示した集落は捕鯨と関連する集落が多いが、

捕鯨や海豚漁の存在が住宅の板張り塗装仕上げと直接関連するかは未解明だが、このように考えると漁業の集団化は関連がある可能性がある。

補注 参考文献

- 1) 山本新平・神吉紀世子・本塚智貴著「塗装の有無から見た太地町・那智勝浦町沿岸集落部の民家に関する比較考察：紀伊半島南部における民家の特色その1、紀伊半島南部沿岸地域に分布する『PAINTED-HOUSE』の特色 その2」日本建築学会大会学術講演梗概集E-2分冊, pp. 509-512, 日本建築学会, 2005
- 2) 三重県で発行されている雑誌『季刊風』創刊号(2000年夏号, 月兎社発行) p. 76-に「町の意匠 パステルカラーの氾濫 宿田曾」として町並みが紹介されている。http://www.i-nagi.com/img/nagi01_mkj.jpg
- 3) 後藤吉彦・木下光・丸茂弘幸著「篠島における住居表層と街路空間の特性およびその変容に関する研究」都市計画論文集 No. 38-3, pp. 739-744, 日本都市計画学会, 2003. 10
- 4) 森下満・柳田良造・野口孝博著「変化と多様の町並み色彩形成のしくみ—函館市西部地区のペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりから—」日本建築学会計画系論文集第592号, pp. 139-145, 日本建築学会, 2005. 6
- 5) 森下満・柳田良造・眞嶋二郎・野口孝博著「函館市西部地区のペンキ色彩からみた町並みの変容—下見板張り洋風建物ペンキ層の「時層色環」分析を中心として—」日本建築学会計画系論文集第579号, pp. 81-88, 日本建築学会, 2004. 5
- 6) 森下満・柳田良造・野口孝博著「神戸・異人館のペンキ色彩からみた町並みの変容」日本建築学会計画系論文集第598号, pp. 109-115, 日本建築学会, 2005. 12
- 7) 日本塗料工業会「日本塗料工業会十五年史」1963
- 8) 陸地測量部発行5万分の1地形図 明治29年第1回修正分、大正15年~昭和2年第二回修正測図分、昭和27年応急修正分、を用いた。
- 9) 1976年撮影 国土画像情報(カラー空中写真) 国土交通省 (http://w3land.mlit.go.jp/WebGIS/index.html) を分析に用いた。
- 10) 佐藤和三(稲取中学校)「写真風土誌伊豆」1968発行
- 11) 佐藤和三「写真風土誌伊豆」1995発行
- 12) ヒアリング調査は、2007年7月26日、12月2日に安良里地区にて現地確認をしながら実施した。ヒアリング対象者は、西伊豆町企画調整課、および西伊豆町安良里地区在住で元・安良里漁業協同組合の村松喬氏である。その他補足的に、集落内の60歳以上の住民5名、ペンキ塗装工事を実施中の塗装業者1名に短時間のヒアリングを行った。
- 13) 西伊豆町教育委員会・西伊豆町誌編さん委員会編「西伊豆町誌 資料第二集 民俗編上巻」文寿堂印刷所 1996
- 14) 元賀茂郡役所編「静岡県南豆風土誌」1914(大正3)年 1973年復刻発行、長倉書店刊
- 15) 和田雄剛著「静岡いるか漁ひと物語」静岡郷土史研究会、2004
- 16) 静岡県HP・漁港一覧 (http://www.pref.shizuoka.jp/kensetsu/ke-430/gyokoitiran.htm) より引用した
- 17) 清水真澄編「安良里風土記」賀茂郡賀茂村立安良里小学校・同小学校PTA発行、昭和46(1971)年、文寿堂印刷所
- 18) 松崎町文化財保護審議会編「松崎町海鼠壁のある建物(海鼠壁調査報告書)」平成14(2002)年、松崎町教育委員会、文寿堂印刷所
- 19) 静岡県都市住宅部建築課「静岡県の歴史的建築物・歴史的町並み」1990
- 20) 図2に示す調査対象集落について、すべて外観調査を行っており、1960~70年代にカラー瓦に葺き替えてあるものものは草葺屋根の農家住宅が各集落に数多く残されているのを確認した。

謝辞

当調査にあたっては報告は、静岡県建築士会賀茂支部 支部長 中村由起夫氏に協力・支援をしていただいた。